

現代文学の食事風景にみる家族問題に関する研究

現代文学 家族 台所  
住空間 食卓

正会員 ○ 竹嶋 大志 \*  
同 横山 俊祐 \*\*  
同 徳尾野 徹 \*\*\*

1. はじめに

近年、家族構成の変化に伴い、ひとりひとりの個人がそれぞれのライフスタイル・生き方を選択できるようになってきている。その一方で、家族がもともと持っていた機能が失われ、虐待などの家族問題もメディアによってとりあげられることも増えている。また、現代の社会背景を反映して書かれる小説においても、さまざまな家族関係、家族構成を対象に描く作品が多くでている。

文学作品に登場する家族や空間はあくまで虚構のものであり、作者の心象の風景である。本研究では家族小説に着目し、文学作品を文学者が捉えた家族と先鋭的な生活の在り方を現わした資料として考えた。新しい家族の在り方をみるため、文学作品から特徴的な場面を抽出し、そこに描かれる家族の姿を探ることを目的とする。

2. 場面構成の比較

【研究方法】まず最初に、作品の中で各場面の占める割合を定量的に把握するために、以下の方法で場面構成比をみる。平成元年～20年の間に出版された家族小説のうちAmazonで評価の高かった50作品より家族構成の異なる8作品(表-1)を研究対象とし、住空間の記述部分の文章を場面毎に分割し、そこに記述される文章量(文字数)を作者が感じる意識時間として集計し、それによる場面構成比を求める。

【分析】作品全体における場面別の割合を図1に示す。家の中で主な舞台になる場所は家族がくつろぐリビングではなく、食卓が置かれている部屋である。「食卓」は物語の重要な場面であることがわかる。単に食事をとる場所だけでなく、家族の集う場所、家族のコミュニケーションを象徴する場所としても認識されている。家族の関係はその家族の食事風景に表れると考えられる。

3. 食事風景の分析

【研究方法】上記の50作品の中で一般的な家族の家族構成であるが、家族の機能が不完全を描いている4作品(表-2)を研究対象とし、特徴的な食事風景を抽出し、場面を把握するための図を表し分析する。

表-1 舞台構成比の調査対象

作品名	著者	出版社	発行年月	家族構成
1 平成大家族	中島京子	集英社	2006年7月	4世帯家族
2 赤い指	東野圭吾	講談社	2006年7月	3世帯家族
3 オアシス	生田 紗代	河出文庫	2006年9月	核家族
4 乳と卵	川上未映子	文藝春秋	2003年11月	母子家族+叔母
5 重力ピエロ	伊坂幸太郎	新潮社	2003年4月	父子家族(別居)
6 卵の緒	瀬尾 まいこ	マガジンハウス	2002年11月	母子家族
7 キッチン	吉本 ばなな	角川書店	1998年1月	母子家族+他人
8 西の魔女が死んだ	梨木香歩	新潮社	1996年3月	祖母+孫

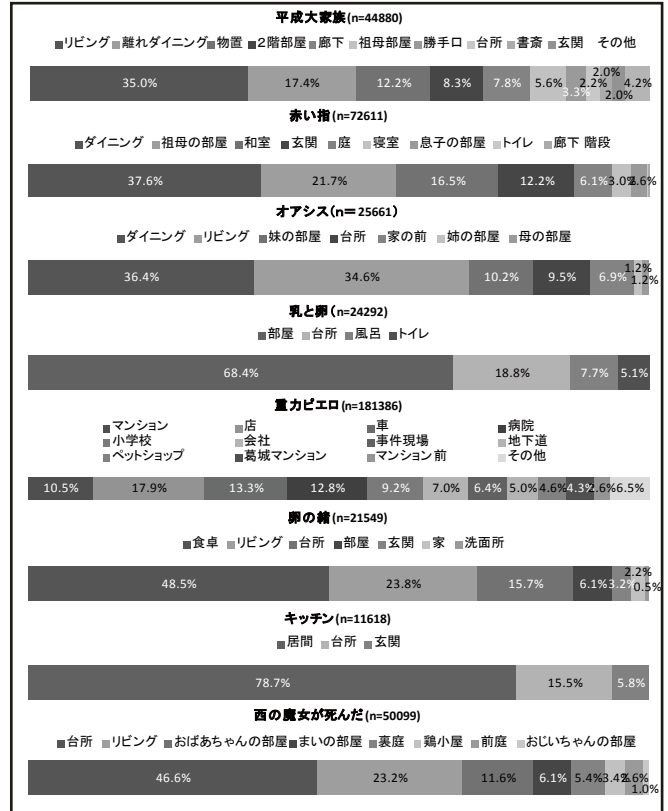


図-1 場面構成比

○家族関係ー父親が単身赴任で離れて住むようになってから、母親がまったく家事をしなくなる。会社勤めの姉と主人公であるフリーターの妹はそんな母親に呆れながらも、母親の面倒をみながら協力して家事をこなす。近所には一人暮らしで温和な性格の叔父が住んでおり、たまに夕食のおかずや料理を作りに来てくれる。母親と子供、特に妹の間では家事をしないのに姉妹の生活に口を出してくる母親に怒りをおぼえることもある。崩れかかっている家族であるが、家族同士での悲壮感はない。

母親が一人でテーブルにつき、出された夕食を食べ、妹はテレビを見ながらこたつで食べる。ひとつの空間にいながら別々に食事している。また、残業で遅くに帰ってきた姉が妹の横で食事をとる。

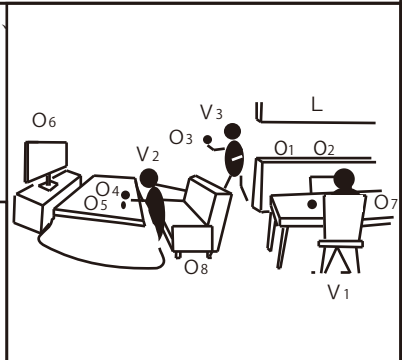


図-2 オアシスの食事風景

表-2 食事風景の分析の研究対象

作品名	著者	出版社	発行年月
a オアシス	生田 紗代	河出文庫	2006年9月
b 厭世フレーバー	三羽 省吾	文藝春秋	2008年8月
c 最後の家族	村上 龍	幻冬舎	2001年9月
d 幸福な食卓	瀬尾 まいこ	講談社	2007年6月

The Study on the family problem seen in the meal scenery of contemporary literature

TAKESHIMA Taishi, YOKOYAMA Shunsuke, TOKUONO Tetsu

a-『オアシス』(図-2)

母親と娘の希薄な家族関係が表れている場面である。リビングとダイニングが一続きになっている空間でこたつとテーブルの二カ所が食卓として使用されてる。この2カ所に適当な距離があるので姉妹と母はお互いに気兼ねなく食事ができていると考えられる。

b-『厭世フレーバー』(図-3)



図-3 『厭世フレーバー』の食事風景

崩壊直前の家族の食事場面である。舞台は家の台所であるが、食事による団欒はなく、冷えたものをレンジで温め食べるだけの部屋になっている。家族での会話もかいむである。

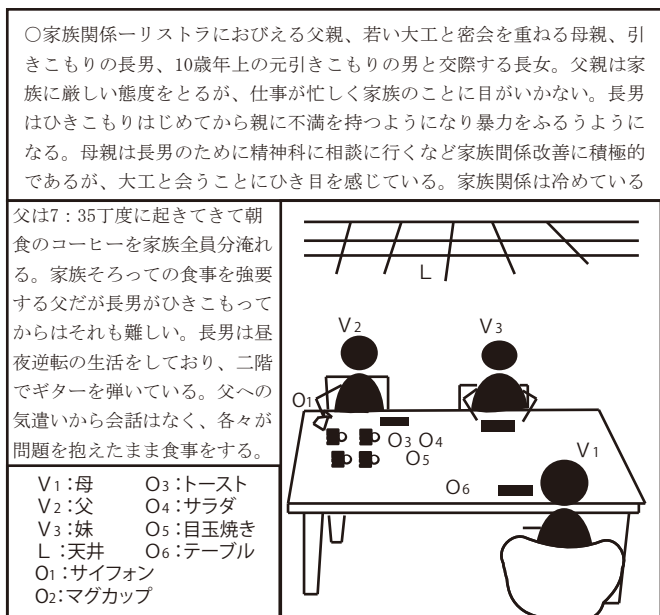


図-4 『最後の家族』の食事風景

c-『最後の家族』(図-4)

家族が無理にあつまり食事をする。食卓は食事をする場であり家族のコミュニケーションの場であるが、生活スタイルが多様化する中でそれを強要されるのは家族の負担になる。家族全員分のコーヒーをいれるなど父親の強すぎる家族団欒の意識が家族の崩壊へと繋がる。

d-『幸福な食卓』(図-5)

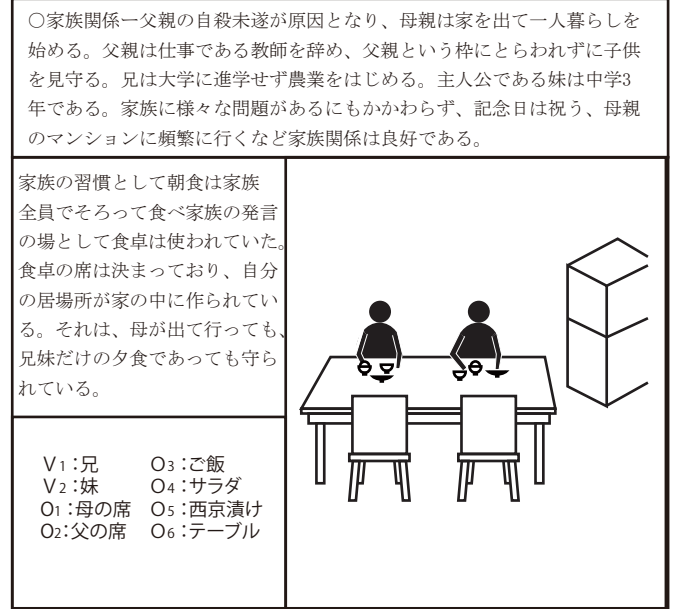


図-5 『幸福な食卓』の食事風景

4. まとめ

文学作品において食卓は居住空間の中で重要な場面としての役割を担っており、家族の関係によっては様々な食卓の場が描かれている。家族のコミュニケーションの場であるが家族全員が揃って食事にするする必要はなく各々のライフスタイルに合った食卓が展開される。しかし、本来の目的である食事が色濃く描かれている訳ではない。さらにそこに登場する人物も母親だけではなく、父親までもが登場する。それは社会の民主化と共に家族、家の民主化が起こっていて、食事風景に父親が描かれなことからよく分かる。台所での描写にはコミュニケーションが多く書かれていた。インスタント食品やスーパーの惣菜など食生活の変化に伴い、台所やキッチンの使われ方が本来の目的ではなかったにも関わらず、調理や食事後、片付けるときなどのコミュニケーション描写が多く、内向きになった個人が家族間のコミュニケーションのきっかけを求めているように考えられる。

注  
注1)本論では、住宅の敷地内の空間を住空間とする。  
注2)本論では、登場人物が行動する場所を舞台とする。

\* 大阪市立大学大学院工学研究科 前期博士課程  
\*\* 大阪市立大学大学院工学研究科 教授・博士(工学)  
\*\*\* 大阪市立大学大学院工学研究科 講師・博士(工学)

Graduate Student, Graduate School of Engineering, Osaka City University  
Lecturer, Graduate School of Engineering, Osaka City University, Dr. Eng  
Prof., Graduate School of Engineering, Osaka City University, Dr. Eng